

書評

宮本正尊著「明治仏教の思潮」

——井上円了の事蹟——

柏原祐泉

本学の先輩で世界的な仏教学者として著名な宮本博士の労作であるが、「あとがき」によると博士には前から「明治仏教の人物と思想」といった著書を意図されていたとのことである。博士に『根本中と空』『中道思想及びその發達』『大乘と小乗』などの大乘仏教の基本的研究に関する大著があることは紹介するまでもないが、また『日本仏教の歴史と理念』など日本仏教史に関連する著書もあり、歴史的研究にも深い関心をもたれているようで、本書も同じ関心から著わされたものである。思うに、博士には自己の仏教学研究が、とくに明治以後躍進的に發達した新しい方法論による仏教研究の流れをうけ、それら先学の愛学護法を精神を繼承し、それをさらに推進すべき使命をもつという、自負と自覚があるようである。われわれ自己の学に銜学化しがちな末学の徒の、大いに学ぶべきところであろう。本書を一読して、本書が明治仏教史に関する学術的研究書であるばかりでなく、なによりも博士の近代仏教学の伝統と精神を開陳披瀝しようとする熱情に支えられているのを感じるのであるが、その意味で本書はまた非常な啓蒙的性格をもっている。

本書には「井上円了の事蹟」という脇題がついているが、全体は六章に分れ、前五章はいわば第六章の井上円了に関する記述への伏線となっている。そのうち、第一章「現実日本の創造的原点」と第二章「排仏毀釈と日本の宗教思想」は、さらに全体の導入部をなし、本書構成の意図、あるいは明治仏教出發時点での時代的性格の見極めとしての意味をもつ。第一章では、まず日本の創造的原点が、広い普遍的立場でなされる、ヒューマニズムによる人間と人間の心の交わりと、および宗教的信念と実践とにあること、それを仏教、神道ともに自覚すべきことが説かれる。第二章は明治維新の王政復古は國際的歴史觀に立った日本民族の生成の歴史觀を促進する意味をもちながら、復古神道論者の偏狭により排（魔）仏毀釈を生み、民衆と遊離したこと、その神道後退に対して、世界的視野で仏教学が登場することが述べられる。

第三章「明治時代の優れた仏教者」では、「報智と指導力」を以て本願寺の近代的改革に当った大谷光尊（西本願寺第二十一世明如）、信教自由運動と女子教育に先鞭をつけた西本願寺派の島地黙雷が注目されているが、とくに東本願寺派関係で、高倉学寮に護法場を付設して宗門維新の旗頭となった關彰院東瀛（空寛）、大著「仏教統一論」を書いて仏教の真髄を明かし宗我を離れて仏教各派の理想の統一を説いた村上專精、英国のマックス・ミュラーに就いて日本の梵語仏典学を開拓した南条文雄と等原研寿、キリスト者内村鑑三と並んで近代日本の代表的宗教者とされる清沢満之について詳述されているのは、われわれに深い興趣を喚起させる。博士は、東瀛に、維新の「世界のうちなる日本」への指向

に対し「日本のうちなる世界」の原点を求めた姿を見いだされる。また村上專精については、その学が思想原理の批判的研究面と実証的な歴史的研究面の両面にわたる点に高い意義があると共に、『仏教統一論』は「仏教の帰着的にして発足点である」涅槃を仏教に一貫した原理としていることを指摘される。『仏教統一論』が「仏教涅槃論」でもあることを指摘される点は博士の遠見であろう。南条・笠原の刻苦勉強した梵学修業は有名であるが、ここで博士自身の就学時代をも織込んで明治・大正期の大谷大学の状況が詳述されているくだりなどは、巻をおく能わざる感がする。また清沢満之については、「日本人が自ら哲学する。荊棘の道を歩いた先覚者」である点に、その真面目があるとされる。本章ではこの外、梵文学、印度哲学の発展に貢献し『大正新脩大藏經』刊行を成し遂げた高楠順次郎や、渡辺海旭・山岡鉄舟・桜井敬徳・福田行誠・フエノロサ・ビゲローなど、明治仏教の発展に寄与した人々の多くに論及されているが、いずれも生きた人物像がよく画かれ、躍動する明治仏教の雰囲気がよくわかる。

第四章「哲学と東洋哲学、その現代的意義」は、東京大学の仏教学講義初代講師原坦山、同じく東大で東洋哲学を担当した井上哲次郎を中心に、仏教が始めて哲学として世界的に位置づけられ、近代性を発揮したことが論じられる。そして昭和九年の日本での仏誕二千五百年記念会、三十一年のインドでの仏滅二千五百年記念式で、仏教学の世界的視野での研究の実りが象徴的に示されることに論及される。第五章「インド・中国・東南アジアと日本の現代的課題」は、インドのアムベードカル博士を中心とする

アンタツチャブルのネオ・ブッディスト運動、インドの自由独立運動に生涯を捧げガンジーと敬愛されるガンジーへの論及に始まり、今後の日本が、仏教布施行の施者・受者・施物の三に執われぬ三輪清浄の空觀を体とし、「世界のうちなる日本」と日本のうちなる世界」の二観点に立ち、アジアの発達に寄与すべきことが論じられる。そこには、エコノミックアニマルへの痛棒がある。さて、終章第六章「井上円了、その思想その事業」で、本書脇題の刻心に触れるわけで、今までの明治仏教発展の記述を背景に、大谷派に育ち東洋大学を設立した井上円了の思想と業績が詳しく紹介されるが、井上を支えた第一原理は「護国愛理」であったという。それは西洋・東洋の哲学が唇齒輔者の関係で結びつき、それによる教育を通じ、国民道徳を高揚することの実践により可能であったとされる。井上はまたそのため生涯に七一四三席の大衆講演を行ったという。井上の東洋哲学への指向と実践行は、明治仏教の能動的な一面を示すものであろう。

以上が管見による本書の大きな梗概と読後感である。本書を讀きつつ感じるのは、博士の明治仏教への強い愛情である。それは、決して過ぎ去ったよき時代への思慕といったものではなく、著者が心とされる中道思想とその実践が明治仏教に一貫することへの確認によるものであろう。その意味で本書はまた、現代仏教への警鐘と啓蒙の意味をもっている。ただ望蜀の感ながら、本書とはやや異和感はあるが、巻末に索引が欲しいと思った。

(昭和五〇年三月、佼成出版社刊、B6版 二九七頁、一五〇〇円)
(本学教授 国史学)